

豊公ほうこうの旧宅きゅうたくに寄題きだいす（荻生徂徠おぎゅうそらい）

海うみを 絶わたるの 楼船ろうせん 大明たいみんを 震ふるわす

寧いずくんぞ 知しらん 此この地ち 柴荊さいけいを 長ちようぜんとは

千山せんざんの 風雨ふうう 時時じじ 悪あしく

猶なお 作なす 当年とうねん 叱咤しったの 声こえ

絶海縷船震大明 寧知此地長柴荊
千山風雨時時惡 猶作當年叱咤聲

解説 秀吉の旧宅を想像して作った詩。

語釈 ※寄題Ⅱその地に行かないで題詠すること。

※豊公旧宅Ⅱ豊臣秀吉のものと住まい。※絶海Ⅱ海をまつすぐに横ぎって渡る。※楼船Ⅱ船の上に櫓やぐらを設けた船。

※大明Ⅱ明の国。大唐・大元・大清などの用法と同じく、国

号に大の尊称をつけたもの。※柴荊Ⅱしばやいばらの雑木。

※時時惡Ⅱ時おり荒れる。※当年Ⅱそのむかし。その当時。

※叱咤Ⅱ烈しく号令すること。

通釈 豊臣秀吉の朝鮮征伐のとき、大海を乗り切ってかの地に押し寄せた軍船は大国の明をも震え恐れさせた。その秀吉の居城も、さして年月を経っていない今日、荒れるにまかせ、雑木のみ生い茂るに至ろうとは、誰が予想することができたであろうか。この付近の山々には、風雨がすさまじい捻うなりをあげて荒れ狂うことがあるが、それはさながら秀吉がだいおん大音声をあげて千軍万馬を叱咤しったしているかのように聞こえるのである。